

**特 集**

「第16回日本臨床環境医学会総会」

(臨床環境16: 65~66, 2007)

**総会を終えて**

—第16回日本臨床環境医学会総会(東京)を終えて—

木 村 穰

第16回総会会長 東海大学医学部基礎医学系

第16回総会は旭川、久留米、仙台と経て久しぶりの東京での開催となった。例年通り7月上旬ではあったが、会場の関係で土曜日、日曜日となり、せっかくの週末を費やしていただくこととなったが、皆さんには熱心に参加していただいた。今回の参加者は約130名、一般演題数はほぼ例年通りの44題に上った。演題申込みに関しては、冬からの準備が少々遅めで、集まりを心配していたが5月の連休明けぐらいにはほぼそろった。しかしながら、その後も数々の修正が舞い込み、抄録集の発送が6月下旬ぎりぎりとなったことは反省したい。会場は東海大学短期大学部高輪校舎で都内としての交通の便はよかったが、会場に使用する校舎自体を解体する日時が迫っていたので、最後まではらはらした。講堂ともいべき大教室は事前に空気状況をチェックしていただいていたが、十分であったかどうかはわからない。また、大教室だけに冷房の調節がうまくいかず、一部の方には寒い思いをさせてしまった。

さて今回は「人と環境の関わりを考える」という大きなテーマを掲げたが、この学会参加者が建築、医学、医療、食品、さらには私自身が得意とする分子生物学の分野と多岐にわたり、できるだけ多角的な視点から環境と人の問題を捉えたかったというのが趣旨である。特別講演では「ポストゲノム時代のヒト疾患解析とその展開」と題して、日本のゲノム研究をリードされてきた 猪子英俊教授(東海大学医学部基礎医学系・医学部長)に御講演いただいた。2003年にヒトゲノムが解読され、現在は各個人の遺伝子塩基配列の違いをもと

に疾患感受性(疾患のかかりやすさ)を解明する研究や薬の開発がおこなわれている状況を分かりやすく解説された。遺伝子ネットワーク解析の重要性などが強調されるとともに、石川哲先生のコメントにもあったように、ゲノム研究に対する予算配分が必ずしも日本の中で妥当ではないとの指摘は耳新しいものであった。

シンポジウムは全体のテーマを受けて、「人は環境物質にどう対処するか」とし、座長を石川哲先生(北里研究所顧問・北里大学名誉教授)にお願いした。長年の研究から砒素暴露と生体反応について吉田貴彦先生(旭川医科大学健康科学講座教授)に、また環境物質の影響を心電図診断で検定する新しい分野を平久美子先生(東京女子医科大学東医療センター麻酔科)に、また建築基準法の改正で再びクローズアップされたダニ・ダニアレルゲンの問題を松木秀明先生(東海大学健康科学部教授)に概説いただいた。アレルギー疾患と環境要因に対する対処法を厚生労働省の研究班でもまとめ役の秋山一男先生((独)国立病院機構相模原病院臨床研究センターセンター長)に、また、環境物質の健康影響で常に問題となる安全性の考え方について柳沢幸雄先生(東京大学大学院新領域創成科学研究科環境学専攻教授)に御講演いただいた。分野がそれぞれ異なっていたが、これが本学会の対象の広がりを示すものと言えるかと感じる。

学会の一般演題も多彩であったが、このうち優秀賞には電磁波の影響についての詳細な研究を海外の状況も交えて報告された東北大学大学院の本

堂毅先生が、また奨励賞にはシックハウス症候群について遺伝子多型から取り組んでいる東海大学医学部特定研究員の松坂恭成博士が選ばれた。どちらも臨床環境医学からは新しい分野を開拓しているものとして高く評価された。

学会終了後に市民公開シンポジウム「シックハウス症候群の基礎・臨床研究から対応策まで」を開催した。例年とはいえ、シックハウス症候群に関する研究の進展を、一般社会に知らせすることは学会としての一つの使命であろう。座長を第一人者の坂部貢先生（北里大学薬学部公衆衛生学教室教授）にお願いし、5名の講演により開催した。最初は相澤好治先生（北里大学医学部衛生学公衆衛生学教授・医学部長）にシックハウス症候群と化学物質過敏症の概念整理をしていただき、小生が遺伝要因からみたシックハウス症候群を論じ、

ついで実験動物を用いた低濃度有機化合物の影響を藤巻秀和先生（(独)国立環境研究所環境リスク研究センター）にご報告いただいた。建築学の立場からは池田耕一先生（国立保健医療科学院建築衛生部長）に、また千葉に建設中のケミレスタウン・プロジェクトについて森千里先生（千葉大学大学院医学研究院環境生命医学教授）から動画を交えた紹介をいただき、なかなか充実したシンポジウムとなった。

学会、シンポジウムともに活発な討議があり、主催者としては参加者に大いに感謝したい。学会運営はできるだけ我々の大学のメンバーで何とかしようと試みただけに、専門家のように手際よくは行かなかった。ただ、懇親会なども気さくに楽しんでいただき、総会後に、それなりに評価していただいた方がおられたのは幸いであった。